

羽田空港から北へと飛び立った飛行機が、東京湾の縁をなぞるように上昇すると、その傾いた機体の真下に巨大ターマパークが見える。そこはかつて豊かな干潟が広がる漁民の町であった。先日、ふと深夜に見た映画にその消え去った町が映し出されていた。映画の中でそこは、放浪に明け暮れる男が己を反省し、美しい女性に心を癒される小さな——しかしどこか書き割りのような——桃源郷だった。一九七〇年公開のその映画は、地に足着いた生活とは何か、と問いかけていた。男の名は車寅次郎といった。

渥美清は、一九六三年公開の映画『拝啓天皇陛下様』で喜劇俳優としての地位を確立する。この映画は、安住すべき我が家は軍隊だと信じ、天皇への素朴な愛に生きる男山田正助が捲き起こす珍奇なエピソードを、軍隊生活・戦場・除隊後の放浪生活とたどりながら点描する。これを帰還兵の内地放浪譚とみれば、軍隊・戦争に生活を剥奪された多くの日本人の戦後に重なる。また、これを『男はつらいよ』の原型とみれば、放浪と帰郷の往復運動者＝車寅次郎があらかじめ「地に足着いた生活」なるものを喪失していたこともうなずける。無数の山田正助たちの亡霊に目を閉ざしながら、渥美＝車に永遠の帰郷（の失敗）を求め続けた私たちはなかなかのサディストだったことになる。

*

占領と開拓の重層的な関係の中で、空間は瞬時にその性質を変えるのではない。空間の変容は、路上の闘争のよう目に見えるものもあれば、人々の意識の中で進行していくものもあるだろう。その再一分節化の過程を仔細に観察すれば、一見何もない荒野や廃墟にすら、人々の行為と言葉の歴史が層をなして堆積していることに気づく。また反対に、コンクリートで塗り固められた空間にも、声なき声の残響を聞くことができるはずだ。

二〇一五年四月五日、普天間基地の移設問題で沖縄県知事と会談した官房長官は、振興策の一つとして、沖縄へのテーマパークの誘致を政府が積極的に推進してきたことを明らかにした。実現すれば莫大な経済的波及効果が期待されるだろう。

会談の六日前、三月三〇日に成田空港の検問が廃止された。二つのニュースは、何かとてもよく似た事態の始まりと終わりを象徴しているように私には感じられた。ただし、顔認証式の監視カメラが配備され実質的には何も終わっていないのだが。

千葉県成田市三里塚での空港建設が「閣議決定」されたのは一九六六年のこと。その後激しい反対闘争が繰り広げられたことはよく知られている。しかし空港は七八年に開港。反対運動の一部はゲリラ的な破壊行為に走り、運動そのものを自壊させた。冒頭のテーマパークが浦安沖に建設されたのはその反対闘争のさなかであった。候補地選定に国際空港からのアクセスは考慮されたかもしれないが、両者は本質的には無関係だ。だが……、日常と切り離された祝祭空間を金で購う人々の耳に、空港反対の声はどのように響くであろうか。そもそもそれはノイズとして、意識の外で遮断されてしまうのではなからうか。基地移設とテーマパークの抱き合わせが巧妙なのは、単なる観光振興策とは異なり、そこに何があったのか、壁の向こうで何が起きているのかに無関心でいつづけることを基本的条件とする空間を、係争中の事態のすぐ脇に作り上げてしまうことになるからだ。

*
*

反対闘争に比して一般にはそれほど知られていないことだが、三里塚は戦後開拓地だった。戦前は御料牧場と呼ばれ、牧畜や競走馬の生産が行われていた。この牧場は空港着工前まで存続していたが、同時にそこは戦後の緊急開拓事業の対象となり、周辺地域の古くからの農民の他、戦災者や引揚者、米軍統治によって帰郷できなくなった沖縄県久米島の出身者たちが入植した。三里塚では、さまざまに異なる出身地・経歴の人々がモザイク状に混ざり合って生活していたのである。滑走路は、そうした歴史の浅い共同体を狙ったかのように建設された。^(*)

戦前のハワイや満洲でも開拓に従事し、戦中・戦後と放浪を余儀なくされた人々が、この三里塚で数十年間地に足着けた努力を積み重ねた結果が、「土地収用法」だった。生活の辛苦は、最終的に無数の匿名者たちの観光・ビジネスの踏み台として購われた。飛行場であれ、テーマパークであれ、そこに施設があるから利用するだけだ。雇用も生み出している。もはや誰も痛みを感じる必要はないのである。

アナキズム詩人岡本潤（一九〇一～七八）が、戦後最初の詩集『襤褸の旗』の冒頭にハイネの言葉を引いていた。「われわれは自分自身が廃墟とならないうちは廃墟を理解しない」と。三里塚の開拓者たちにとって土を耕し続けることは、廃墟となってしまう自分自身をみずから耕すことだったのではないだろうか。そういえば、『拝啓…』の山田正助もまた戦後開拓にたずさわっていた。彼の最期は交通事故死。三里塚の行く末を暗示していたのである。岡本潤に「三里塚の夜」という詩がある。一九二九年刊行の『新興文学全集』第十卷（平凡社）に収められている詩である。「三里塚の風は荒く砂を飛ばした／風に洗はれた大きな月だ」と始まる。さらに途中を抜粋すると、「屋根が吹つ飛んちやつたんで／ほこりまみれになつて修繕したばかりだ」／カーテン代りの蕙が風にひるがへる／人家は遠い、吹きさらしの掘立小屋だ／岡ッ引もあなければ女けもない／「中略」／酒は熱いぞ／つぶしたての鶏はうまいぞ／夜露を含んだ野菜は豊満だ／あらつぼくて新鮮な／曠野の食卓に快適な食欲をあふれ」とある。戦後開拓よりも二十年近く前に、震災で仲間を殺された者たちの吹きだまりのような掘立小屋がそこにあった。「女け」は無かったが、ここもまた廃墟を抱えた放浪者の避難場所だったのである。

（村田裕和）

* 神田文人・高澤美子「戦後の三里塚牧場の開拓と沖繩・久米島」（『環境情報研究』第八号、二〇〇〇年四月）。

* * 「法律には、法律の腕をのがれる希望があり、それだけにますます、法律は運命のように脅迫的なることをしめす」。ヴァルター・ベンヤミン『暴力批判論』（岩波文庫、一九九四年）四二頁。